

# Stray sheep

“我々が見たり、見えたりするものは、みな夢の夢にすぎません。”

(夢の夢 ポー 阿部保訳)

椎名 利(化工会)

歳を取ると体が痩せるように、口腔も変化するらしく、入歯が当たって痛いので新しいのを作ることにした。

入歯を作るには、まず歯石を除き、歯を洗淨する必要がある。動きやすそうな臍脂の上張り大きなポケットのある黒いスカートの若い女性が、私の目にタオルを掛ける。私の目が見えては睨まれているようで作業しにくいのだろう。

歯石の程度を調べているのだろうか、歯茎をさしながら「一、二…」といった数字を読み上げている。歯石の除去は先の曲がった針状のもので、歯の隙間などをひっかいて除去する。

これは歯科衛生士の仕事だが若い女性が多い。下手な人に当たると痛いこともある。

と、……美佳も衛生士だったのを思い出した。こんな出会いだった……。

「ごめん、ごめん、痛かった」、美佳は少し首をすくめて私を覗き込んだ。

彼女は、私の大学の側にある歯科衛生士専門学校に通っていた。その実習過程で歯石を三人取ることが求められていたのだ。

これには訳がある。彼女は中岡先輩のダンスのパートナーで、何かとアドバイスしてくれる彼から頼まれたので仕方がない。彼女はパートナーと云うより、中岡にとっては恋人かもしれない親密さだった。

その美佳は、京急沿線のY市の歯科の娘で、有名なミッション系の女子高出身のブランドだった。

一方中岡は、桜の名所弘前市近郊の町出身で、教師の家庭に育った。自ら山男と称して山やハイキングなどに出かけていた。

私は、昭和二十九年(1954)大学に入学し化学を専攻した。

理系の教科は、講義、実験、演習など盛り沢山だが、青春を楽しむ姿は変わりなかった。

しかし、当時はまだ娯楽が少なく、娯楽と云えば、多くの生徒は麻雀かダンスをしていた。

私は、ナンパだったのかダンス派だった

月に一度ダンス部主催のダンスパーティーが学内のホールで催されるが、このパーティー

は学部長が娘さんと踊ったりする、いわゆる社交ダンスのアウトホームなパーティーだった。

女子は、どこから情報を得るのか、女子大や女子の専門学校の生徒で、顔見知りの人も多く私はフリーで気楽に踊れた。

ダンスの上手い女性は、足をぴったりつけて、男性のリードに軽く反応する。常連の女性は概ねダンスが上手かったが、ダンスの上手さと容姿は反比例する。美佳がいい例だが、ダンスはうまくなかった。

私もパーティーの常連で顔見知りが多く、踊る相手には困ることはないが、逆に一度も相手が出来ず不仲になることもあったが、美佳とはよく踊った。足を踏まれることもたびたびだったが、好きなようで楽しそうに踊っていた。

特にタンゴが好きで、なかではタンゴが一番上手だった

中岡たちとはよく踊りに行った。踊りながらパートナーチェンジをする。彼たちとのダンスは楽しかった。

中岡と美佳とのデートの時、中岡に頼まれよくダブルデートをした。それは美佳がクラシックファンで当時流行の名曲喫茶——個人でオーディオを持つのが普及してなかったので流行っていた——を好んだので、同じクラシックファンの私がいるのがなにかと都合がよかったのだろう。

美佳と中岡は、寮祭で知り会ったようだが、どう見ても中岡は美佳にふりまわされていた。

その様子は、漱石の『三四郎』の美弥子に振り回される三四郎のようだった。

その中岡は、卒業時、「俺には都会の女性はわからん」との、意味不明な言葉を残して任地の九州へ去っていった。

私は、昭和三三年(1958)A社に入社し川崎工場勤務となったが、偶然美佳と再会した。

それが美佳との恋とは言えない恋物語の始まりだった。

その出会いは、私が就職した年の夏だった。川崎勤務の私は、京急の川崎駅からいつものように乗り込むと見覚えのある顔に出会った。

「あら、哲さんではない…」

その声の主は美佳だった。切れ長の目、細く描かれた眉、オーガンジーのブラウス、胸の谷間も見えそうなすっかり大人になった彼女を見たのだった。一年ぶりだろうか懐かしく横浜で食事をした。互いに近況の報告がつきなかったが、中岡のことが話題になると美佳は応えをはぐらかすと、

「会社はいかが…」と問いかけてきた。

「工場だから朝八時、早くてまいる」と応え、

「でも、若い女の子も多くて楽しいよ」と、応えると彼女は「哲さん優しいからもてるでしょう。付き合っている人いるの？」私が首を振ると、「貴方が結婚するまで付き合ってくれない？」との言葉に、黙って頷いたが、彼女は私を覗き込むようにして、「でも結婚の話はしないこと…タブーね」と、笑いながら云うのだった。

その時、私は親密になると男女の間に、友情が成立するとは思っていなかったが、なんとなく受け入れていた。

私たちのデートは、美佳の電話で始まる。私が決めることはなかった。

デートはおおまかに分けると、二つのケースがある。

第一のケースは、名曲喫茶巡りだった。まだ、個人が十五インチのウーハー、スコーク、ツイーターと言ったスリーウェーのスピーカー・システムを持つ人は少なく喫茶店にたより、名曲喫茶は繁盛していた。彼女はオペラやシンフォニーのような華麗な曲が好きだった。

聴くと感想を述べる。例えばブラームスの『交響曲一番』の冒頭、ドン・ドン・ドンとティンパニーのゆっくりとしたリズムに引きずられ、弦楽器が低く奏でる序奏。この執拗なまでの主題の繰り返しを『内向する情熱』と称した。

私もこの曲は好きだった。特に第四楽章のティンパニーの連打に続き、悲劇的な弦楽器のメロディーを、伸びやかなホルンが『歓喜の頌』の旋律を奏で、透き通るような高音のフルートが繰り返し替えし、やがて満を満たした弦楽器が『歓喜の頌』を奏でる。それは長い冬の雪解けに似た春を待つ希望に満ち、今までの悲劇的な残滓を一気に流し去るようだった。

これを美佳は「クララに対する屈折した愛」と評した。

当時は、今よりクラシックファンが多かったのだろうか、クラシックは喫茶店ばかりではなかった。私たちは区内を散歩中に『リゴレット』との看板のあるバーを見つけた。名前につられて地下の店に入ると、漆喰の壁がローズウッドで縁取られたしゃれた店だった。

BGMに『リゴレット』がかかっており、丁度道化師リゴレットが娘のジルダに父親の情を語る有名な二重唱が静かになっていた。

私が「店の名前の由来ですか」と尋ねると、マスターは同好の客と見たのか：

「私が初めて見たオペラなのです…。バリトンが主役のオペラなんて『リゴレット』以外知りませんが、このLPのバリトン、ブルゾンがまた好きで…」と応え、私どもを同じ仲間として歓待してくれた。

また、このマスターのマティーニは、ジンとベルモットのバランスが巧みで美味しかった。

ある時、私がマティーニ好きなのを知ったマスターが、アメリカ軍人に教わったのですが『ウォッカ・マティーニ』を教えてくれた。

「ジンの代わりにウォッカを使いロックグラスで飲むのです」。飲んでみるとアメリカ人らしい気取気がないすっきりした味がした。

このバーを名曲バーと名付け、以後私たちのデートコースの一部になった。

昭和三十年代はステレオの初期で、ステレオ版も少なく新しい盤が入ると必ず聴かせてくれた。

第二のケースはダンスだった。当時ダンスの会場は、大学のクラブがホテルの会場等を借りて開催するパーティーかクラブ(キャバレー)だった。学生主催のパーティーは混みあってタンゴなど広い場所を必要とする踊りは出来なかった。

一方クラブでは、同伴席が設けられているところがあり、飲みながらダンスを楽しめた。そのようなクラブは何所かあったが、私たちが好きだったのは横浜のクリーフサイドだった。

美佳の好きなタンゴは、『淡き光』『カミニート』と言った、アルゼンチンタンゴだった。歯切れがいいバンドネオンの金属音が好きなようだ。タンゴは彼女の得意なレバートリーだった。彼女はホールドすると背をそらし気味に首を傾げる。目線を合わせステップをふみ一気にプロムナードに開く。ピポットタウン、リバースターンと踊り続ける。

私は、会社の女性とも付き合いはあったが、噂が先行し困惑する例を見ていると腰が引けた。

そのため、この美佳との平凡なデートの方が気兼ねなく楽しめた。当時、結婚するまでの男女関係は、純潔であるのが普通だった。そのモラルに自然に従っていたのだろう。私は美佳のお嬢さんの容姿、趣味、お洒落など、ともすれば気ままにさえ見える美佳が好きだった。しかし、手を組んだり肩を寄せたりすることはあったものの、それ以上になることはなかった。

彼女とのデートは全て彼女の選択に任されたが、その様子は美佳に振り回されていた中岡を笑えなかった。

彼女の『結婚の話はタブーよ』と云う言葉の意味は、美佳が歯科衛生士の資格を持つことでもわかるように、当然歯科医との結婚を求められているに違いない。そのため、結婚の障害にならない友人を求めたのだろうが、私がそれに該当する男性だとの判断は、どのようになされたのか判然としなかった。

しかし、結婚のタブーがなければ別な展開をしていたと思うが、親密度は増したが不思議にも恋愛感情を抱くことはなかった。彼女との関係を友情にとどめられたのは、私の矜持だったと思う。

しかし、この私の感情を乱す出来事が起こった。

口腔の清掃は終わりに近づいたようで、電動ブラシでの歯の磨きも終わり、テグス状の糸のようなものを歯間に通している。間にしばしば口をゆすぐように勧められた。

それは、付き合い始めておおよそ二年たった、年も押し詰まったある日、  
美佳の「ニューグランドのニューイヤー・パーティーに行こう」との提案だった。  
私は、深夜に至るこのパーティーは宿泊を必要とするので驚いた。  
それを察した彼女は「もちろん部屋は二つよ・・・」と応えた。

当日、本日の入船、『プレジデント ウィルソン号』と、ボードに白字で書かれた玄関に入り、  
部屋でコートを脱いだ彼女は、若草色のカクテルドレスを着ていた。ボーイの案内で二階の、  
ボールルームに入った。

ホールの壁は、濃いローズウッドで被われ、所々に幾何学模様が描かれている。正面の舞台  
の上部には孔雀が長い尻尾とともにレリーフされ、バンドが静かな音楽を演奏していた。天井  
は、わずかにカーブする梁がアクセントをつけ、側面につけられた照明が天井を照らし、ホー  
ルを柔らかく覆っている。

私たちのテーブルはバンドに近い位置だった。早速マティーニなどを注文し二人で乾杯す  
る。

（このようなパーティーに、私なぞと来ていいのだろうか？）と思うが、美佳は楽しそうに  
舞台を見上げ、ワインを飲んで屈託がなく、私の心配なぞ気付きもしない。

ピアノが弾み、バンドネオンが金属的なリズムを刻むと、バイオリンが『アディオス・パンパ  
ミア』のメロディーをゆっくりと奏で始めた。

「空いているうちに踊ろうか」美佳を促しフロアーに立つ。

私は、背を少しそり気味に首を傾げ、私に身を預けた彼女を、躰を右に深くまわし右手で支  
えた。

淡い若草色のカクテルドレスは、柔らかいシルクで胸のくぼみをのぞかせ、なで肩の白い肌  
は、シルクのストールで被われていた。細い首元の髪は綺麗な生え際を見せ、ほっそりとした  
白いうなじに、私は胸を弾ませた。

目でうなずきリズムに合わせ、ホールの中央に大きくステップを踏んだ。腰にまわした右手  
でサインを送り、一気にプロムナードに開く。左を向いた美佳が、細い鼻梁の横顔を見せ、広  
がりあるドレスの裾を、舞わせる。わずかに躰を開き、つま先立った足を交差させ、大きくステ  
ップを踏む。彼女に向けた一瞬の視線が、うなじから胸元に広がる白い肌をとらえた。

ピポットターン、一瞬の停止。彼女の目が微笑む。男性歌手が巻き舌で、

「Adios, pampa mia, me voy me, voy at ierras extrans・・・」と歌い始めた。

美佳は、私と深くクロスシカクテルドレスの裾をいっぱい広げ、大きく開いた白い胸元を  
見せてそり返り、私の深くまわした右手に身をゆだねた。またある時は、左手をかざす私の前

でドレスを舞わせながら鮮やかに回り、プロムナード、リバースターンなどを繰り返し、ホールいっぱい大きく踊り抜けていた。

『フェリシア』、『ア・メデア・ルス』と、タンゴの曲が続く。

ドレスの裾をなびかせ、小柄ながらそり返り、きびきびしたリズムで踊る美佳、私たちはタンゴのリズムそのものになっていた。

やがて、バンドが緩やかなルンバのリズムに代った。美佳は、少し離れゆっくりと膝でリズムをとりながら、ボックスを踏む。リズムにのって腰が揺れる。ドレスの裾をひるがえして回る。

やがてワルツが演奏され、バンドが交代するのを機に我々は席に戻った。

ジンの松ヤニくささが心地よい。マテニーはジンが多くては深みにかける。フレンチベルモットが多すぎると、なんとも締まらない。

私たちは、グラスを軽くあげ乾杯した。

バンドは、ゆっくりとしたスローのリズムを奏でていた。フロアーの中程は、ほとんど動かずに抱き合うペアに占められ、数組のカップルがその周りを大きく踊り抜ける。着飾った衣装はいずれも艶やかで、あたかも、水族館の熱帯魚が美しい色彩をばらまきながら、水槽を回遊しているのを見ているようだった。

「バンドネオンのスタッカート、素敵ね。それにタンゴの踊りって、一拍停止する感じでメリハリを付けて踊るでしょ。きびきびしていて、とても好き。それに情熱的ですよ」

「でも、後ろ向きの情熱だよ。どれも去っていった女性への挽歌なもの」などと、タンゴの話に興じた。

そのころになるとホールは、踊るカップルで混みあい、タンゴやワルツを大きく踊るのは難しくなっていた。皆、自分の周りに出来ている小さな空間で、凭れるようにして踊っていた。

私たちも、スロー・チャチャチャ・マンボなどを踊り、テーブルに戻ってはアルコールを飲み、すっかりリラックスした踊りになっていた。

明かりをおとしたホールでは、幾筋かのスポットライトがタバコの煙を巻き上げ、螺旋形の渦を作っている。

陶醉したようにぴったりと密着して踊る人、頬を寄せ合う人、パーティは最高潮に達していた。

私も美佳をぴったりと抱き踊っていた。私の頬に触れていた彼女の髪の毛は、いつの間にか頬になり、私を見上げた彼女の目をのぞき込むようにして、軽く唇に触れた。

その彼女の柔らかい唇は、意外にも激しい反応を返してきた。

十二時が近づくと照明が消され、新年とともに点灯されると、港内に停泊中の船が一斉に警笛を鳴らし新年を祝った。

私たちも部屋に戻ると、美佳も一緒に私の部屋に入った。

私が上着を脱ぎソファに座ると、彼女もストールをはずすと座った。

私が、戯れに唇を彼女に突き出すと、彼女は私をソファに押し倒し、覆いかぶさると激しくキスした。激しいキスと彼女の匂いが私を包んだ。

胸に手を伸ばそうとすると、「キスだけ…」とつぶやいた。

その行為は恋人たちのものだった。キスだけの愛撫は続いた。長いようであり短かった。

何時の間にか彼女は部屋を出ていた。

翌日、別れ際に彼女は一月の最後の金曜日をデートの日とした。

その彼女の行為は私を乱した。彼女のもうけたタブーは、私に友人としての交際を求め、友情の範囲を逸脱しないのを求めていると思っていたが、逆に美佳はタブーを超える情熱を求めているのだろうかとも思った。確かに、彼女が私に好意を持っているのは感じていたし、私が美佳に好意を持っているのを彼女も感じていたに違いない。

男女関係は結婚に至るのが幸せだと思うが、障害を乗り越えて結ばれる情熱的恋愛にあこがれはあるものの、美佳の真意もわからず行動を起こすのは、互いに傷つく心配があると思われる、今後の逢瀬の中で彼女の真意を確かめようと思った。

その金曜日、彼女はとても陽気だった。クリーフサイドで、どこで覚えたのかマンボを踊る。軽く手を握り曲げた肘を振りながら前にステップすると、肘を錘のように後ろに反動をつけると後退する。たまにツイステップを踏む動作が腰の動きをあらわにした。

また、私が結婚を暗示する言葉を口にすると、「キスス、キスス、キスス」と、応えるのだった。

当然のように『リゴレット』で、いつものように、彼女はギムレット、私はウォッカ・マティーニを飲む。

BGMで『トスカ』が静かになっていた。

私が「カバラ・ドッシュが刑場で、最後にトスカとの愛を歌う、有名なアリア『星も光りぬ』が好きだ。こんな恋を語れるようになりたいものだ」と、美佳を見つめると彼女は

「貴方はロマンチストね…」とはぐらかし、グラスを上げるとギムレットを再度注文した。私が帰る時間を心配すると

「今日は終電車でいいの。時間はわかっています」と応える、美佳はかなり酔っていた。

日ノ出町の駅で終電車を待つ。終電車がトンネルをくぐりぬけて入ってくると、美佳は人目も構わず私をハグすると、「明日、私の結婚式なの…」と呟き、手を振りながら電車に乗り、私から去っていった。

歯の掃除は終わったらしく、

「型を取るのので口に押える手を入れます。しばらく鼻で息してください」との声とともに、歯に柔らかいものが押し付けられ、終わると目を覆っていたタオルがはずされた。

私は、出来上日を確認して外に出た。冬にしては暖かい日だった。

今思うと、ニューイヤー・パーティーでの美佳の『キスだけ…』との制止を、無視していたらと思わぬでもないが、これは最後まで友情を逸脱しなかった私へのご褒美だったと思った。

だが、結婚式の前夜、終電車まで付き合わされた美佳の意図はわからなかった。

雲ひとつない紺碧の空に問いかけるかに見あげると、どこからともなく、

「stray sheep」との、リフレインが聞こえてきた。

2019-4-30 平成最後の日